

さちひろ

天理教狭千廣分教会の広報紙

- 1面・みんなの教理入門(12)
- 2面・幸せを届ける言葉
- 3面・連載・おさじぶの点滴
- 4面・教会の動き・編集後記

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 TEL072-365-2571

E-mail :wat@sachihiro.com url :http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡

信仰とはたすかせることであり(註)、たすかるとは陽気ぐらしでできることであるから信仰は生活(ぐらし)の問題であると言える。そこでしばらく(今回と次回で)生活と信仰の問題を考えてみたい。

一般に生活について考える場合には、大体二つの面に注目する。人間の問題と環境の問題である。人間の問題には人の集まりである社会と、人の持つ財産である文化の二つがある。文化には有形(物質的)と無形(精神的)の二つがあるが、文化を形成するものとして価値と言語(言葉)と技術の三つの要素が重要である。

人間は個人が一人だけでは生きられないので、集団(グループ)を作って生活する。集団の成立や組織などは非常に長い歴史を持っているのが普通であるので、集団そのものについては、個人としては親神様によって守護されていることを理解していくより外はない(この点は前回(連載11)



「みんなの教理入門」連載・12 生活の心

天理大学名誉教授・芹澤 茂

天理教の教えを、天理教学の泰斗・芹澤茂先生がわかりやすく解説します

「家族の姿」にその一例を述べた。)人間は、集団すなわち社会に所属して生活するが、また文化を持っている。この文化は人間が創造したものと一応考えられている。

ところで、人間はどういうものをつくって文化としていのかと言えば、「価値あるもの」である。価値がないと思われるものは捨てられる。価値のあるものと言っても様々で、小さい子供には川岸で拾ったきれいな小石とか、工事場で拾った鉛管の切れ端が宝物であるが、少し大きくなればガラクタに思われる。大人には宝石が魅力があるが、何の興味もわかない人もいる。

このように価値あるものは様々であるが、価値そのものについては、古来三つのものが価値であると言われている。真・善・美である。最近では宗教の研究から、聖という価値が加えられた。この価値を、環境から得た材料をつかい、言語

教会の動き

- 朝づとめ…毎朝・6時30分
 - 夕づとめ…毎夕・7時00分
 - 元旦祭…1月1日午前0時30分
 - 春季大祭…1月21日午後1時30分
 - 秋季大祭…10月21日午後1時30分
 - 月次祭…毎月21日午後1時30分
 - 春・秋季霊祭…3月22日・9月22日 午後1時30分
- ※教会の場所は、左の地図の📍マーク。市立公民館の裏・西側です。



中河大教会創立百二十周年決起の集い

大教会の創立百二十周年を来年3月31日に迎えます。それに向けての歩み方について、部属教会の主だった人々を集めての集い、「決起の集い」が、先月1月25日、本部おやさとやかた・乾隅棟7階講堂に、参加者835名を集めて、催されました。狭千廣分教会からもわたしを含め4名が参加しました。

立教172年 春の学生おちぼがえり

- テーマ 世界の友にをやの思いを ~今、心を一つに!~
- 主催 春の学生おちぼがえり実行委員会/天理教学生担当委員会
 - 趣旨 道につながる学生が、こそっておちぼに寄り集い、真柱様のお言葉を通してをやの思いに心を一つに揃え、陽気ぐらし世界実現に向かって、一手一つに成人の道を行っていくことを誓い合う。
 - 日時 3月27日(金)~29日(日) (2泊3日)
 - 集合 午前9時30分 天理駅近鉄改札前
 - 参加対象 高校生(新1年生を含む)、大学生、各種専門学校生
 - 宿舎 第十二母屋(大阪学生会館)
 - 内容 式典(真柱様のお言葉、道真アワー、別席、後夜祭「春まつり」、大阪学生会館フィナーレ等)
 - 参加費 4000円
 - 携行品 ハッピ、着替え、筆記用具、洗面用具、保険証(コピー可)、席札(別席者のみ)
 - 連絡先 各支部学生担当委員まで

編集後記

▼この年第2号目(通巻第34号)となります。本号も、巻頭から連載記事満載でお届けしております。▼来る3月1日、大阪教区福祉部主催の「福祉研修会」に北九州市でユニークで先進的な里親活動を展開されている土井高德氏が講師としてお越しになります。氏とは、ネットでの知り合いで、以前に何度かお目にかかったことがあります。昨年、その体験と積み重ねられた臨時的な知識をもとに『子どもは神様の贈り物』(福村出版)を上梓され、NHK・クローズアップ現代などでも取りあげられました。▼そんな話も含めて日々の話題を綴るブログもご覧ください。 [#やまさんのブログ](http://sachihiro.com) から入れます。(わ)

わたひろ 第34号

編集兼発行人・山口 渡
平成21年2月8日
大阪狭山市今熊1丁目1133番地
TEL・072136512571

や技術によって有形・無形の財産につくり上げたものが文化で、人間はこの文化によって生活している。

生活をこのようにみると、人間はごく小さい子供のときから、価値を理解し、価値あるものを創造し、それを理想として生きていることがわかる。これは自分もそうであり他人もそうである。

このような生活を大切にすることが、陽気ぐらしにも必要である。そこで、「大切にすること」とはどういうことか、であるが、これをごく簡単に教えられた教訓がある。

「人を悪く言わないように」

おやさま(教祖)はこれを人々によく教えられたので、昔の信者はみなこれを知っていた。人間は、見抜き見通しの親神様の子供として一れつ兄弟姉妹(きょうだい)であるから、この教訓を守るのは当然である。

「人のうわさをしない」「人の陰口を言わない」「ように心掛けることが必要なので、これを心掛けるにいて、知らぬ間に「人を悪く言う」ような心遣いを

している、やがて「人を傷つけ」、さらに「人を傷つけても平気である」ような心になつてしまふ。

人を傷つける心遣いは「むほん」の心であり、親神様は「むほんの根を切りたい」と言われる。むほんによって人間の生活は平和を失い、くずれてしまふからである。

もう一つの教訓として「つつしみ(慎)をあげたい。

このような教訓は数多くあるが、要は、教えられた教理(かしのもの・かりもの、元初まりなど)から何をしたらわるいのかを考えることで、そうしたらわかることである。

(註) 信仰のたすける面については連載19以降に述べる予定である。)

芹澤 茂(現・天理大学名誉教授、

この記事は、昭和59年に「天時時報」紙に連載されたものです。



幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよつとひとこと」

幸せの花

(善本社刊) から

桜は、開花期でも、
昼の気温が十五度を超えても、
夜の気温が十度以下に冷えると、
つぼみは眠って目覚めない。

ということは、
昼と夜との温度差が大きく違つくと、
決して、桜は開花しない。

考えてみると、人間も表と裏、
口と行いとが大きく違つと、
人に嫌われ見捨てられ、
決して、

幸せの花は咲かない。

やはり、当然のことながら、
心と口の行いの違(たが) わぬ
誠の人に、

「幸せの花」は咲く。

おさしづの点滴 (13)

人間というものは、身はかりもの、心一つが我がのもの。たった一つの心より、どんな理も日々出る。

(22・2・14)

【解説】

みかぐらうたで「なんぎするのまこところから わがみうらみであるほどに」とも歌われています。また前のおさしづで「やまひのまとはころから」を引きました。このおさしづは、病のよりに身体上に現れることに限らず、人間の心ひとつから、「わたし」の身体をはじめ「どんな理も日々出る」と仰っています。「たった一つの心」を変えらるることによって、親神様が「どんな理も受け取」り、その心にふさわしい姿

たった一つの心からどんな理も出る

を現象として現されるのです。

科学は、通常そのような心と世界の現象のつながりを認める立場にはありません。しかし真実の心のたすけを説くこのお道は、このつながりこそ大切なものと考えられます。

心と身の内、そして世界が、親神様を介してつながっています。人間にはこのつながりはなかなか信じがたいことかも知れませんが、親神様は、そのことを実際に見せて、体験させて知らせて道を教えられたのであります。これが「心一つが我がのもの」の意味であり、かしのもの・かりものの教えの核心です。この教えに、そしてその働きに目覚めるところに、この道の信仰の大きな第一歩があると言えるでしょう。

【おやの全文】

卷一(明治二十二年二月十四日

大和国平群郡若井村講元松尾与蔵二十九才おさしづけさしづ

さあくだんくの席く、返やし
くの席、又一日の日の席、席に順序
の理、生涯の心持ちての席。生涯の理
を論ずには、どうせこうせいとは難し
事は言わん、言えんの理を聞き分け。
人間というものは、身はかりもの、心
一つが我がのもの。たった一つの心よ
り、どんな理も日々出る。どんな理も
受け取る中に、自由自在という理を聞
き分け。常々誠の心治めば、内々睦ま
じいという理を出ける。それ世界成程
と言う、成程の者やと言う理を出ける。
成程という理を受け取るのやで。これ
までもよう聞き分け。代々の道がある
で。だんくの処尽し、席無くして身
も隠した処、さあく代々さあくさ
づけを渡す。かろろうだいのさづけ
を渡す。さあさあしつかり受け取れ。

この記事は、平成15年より3年間「天時時報」紙に「おやのことは」として毎週連載された記事に加筆したものです。